

発刊にあたって	1
これまでの研究の経緯	1～2
研究大会を終えての成果と課題	2
次期研究に向けての取り組み	2～3
教科等の研究実践	4～8
総合学習シャトル 総合学習 CAN	9～11
研究文化の創造	12
あとがき	12

発刊にあたって

校長 平 篤志

早春の候、皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

本校では、長年にわたり、「ものがたり」¹をキーワードとして、教員一同「学ぶこと」と「生きること」をつなぐ試みに取り組んできました。「ものがたり」とは、当事者の語りを通して、よりその人に合った問題の解決法を見出そうとする Narrative approach の核をなすものです。

本校では、この「ものがたり」がもつ力を授業に活かすことを通じて、生涯にわたって学び続けようとする強い意志をもった生徒を育成することをめざし、さまざまな取り組みを行ってきました。本年度の教育研究発表会は、これまでの試みをさらに深め、「自己に引きつけた語り」を生み出す授業を構築することをテーマとしました。このテーマに迫るために、単元構成の仕方や、問いの立て方、学びの振り返り方、教師の関わり方などを検討してきました。しかし、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大のため、残念ながら発表会自体はとりやめ、誌上発表という形を取るに至りました。

一方で、平成30年度より、文部科学省研究開発学校の指定を受け、生徒自らが主体的に課題を設定し、解決しようとする異学年合同による共創型探究学習(総合学習 CAN)の研究開発を続けてきました。今後は、これまでの実績を活かし、さらに進化した総合学習 CAN をめざしていきます。

本号の研究便りでは、次回の教育研究発表会を見据えながら、学習に関する多様な研究テーマ、授業における実践と評価のあり方、学習を支える学校環境・学校文化づくりなどの観点から、各教科・領域ごとの研究内容を掲載しました。分析方法・分析内容に至らぬ点もあろうかと存じますが、忌憚のないご意見をお聞かせ頂ければ幸いです。最後に、今後とも変わらぬご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。

研究主題

「わたし」が変わる「ものがたり」の学び

— 語り合い、探究する中で、「自己に引きつけた語り」を生み出すカリキュラムの提案 —

(第一次終了)

1 これまでの研究の経緯

本校では、「自立した学習者の育成」をめざし、生涯にわたって学び続ける意欲やその基盤となる力の育成を中心に授業実践及びカリキュラムの研究を進めてきた。平成26年度大会からは、ナラティブ・アプローチ²としての「語り」の研究を継続しつつ、個々の学習者の学びの文脈に沿う

¹ 「語る」行為と「語られたもの」の両方を含む概念。特に、教育活動の中で、生徒が「語る」ことを通じて学びの意味や価値を実感し、自己を形成していくことを重視する点で、2013年より本校独自に「ものがたり」とひらがなで表記している。

² ナラティブ(語り、物語)という概念を手がかりにしてなんらかの現象に迫る方法。(野口裕二『ナラティブ・アプローチ』勁草書房、2009)本校は、振り返りを語りの視点から捉え直す自己理解法ととらえている。

自立した学習者

実
自己に
引きつけた
語り

花
表紙、など

葉
原稿、
お礼状

光
花束
結婚

葉
数詞の
見直し、考え方

集まりをつくり

共通型探究学習
シャトル
CAN

ものがたりの授業
共通学習
I・II

特別活動

時間
語り合いの

2 研究発表会を終えての成果と課題

調査期間	(はい) 4	(はい) 3	(はい) 2	(はい) 1
H31 3月	45%	35%	15%	5%
R1 7月	45%	35%	15%	5%
R1 12月	45%	35%	15%	5%
R2 3月	55%	35%	10%	0%

(1) 成果

Category	H31 3月	R1 7月	R1 12月	R2 3月
Category 1 (Light Gray)	35%	40%	45%	50%
Category 2 (Medium Gray)	25%	20%	15%	10%
Category 3 (Dark Gray)	10%	10%	10%	10%
Category 4 (Black)	30%	30%	30%	30%

○異なる考えでも自分の意見を述べること、根拠に基づいて語ること、疑問に思った点について問うことの意識が生徒の中で高まっており、語り合い、探究することへの意識の高まりが伺えた。

(2) 課題

●学んだことから「自己に引きつけた語り」を生み出すための振り返りの手立ての工夫。

●根拠に基づいて問い合う探究する学びの集団づくりやその仕掛け

3 次期研究に向けての取り組み

前回までの研究を継承しつつ、「ものがたりの授業」を通して、生徒が学んだことの意味や価値を実感できる授業を引き続き追究していく。今期は、研究発表会の成果と課題を踏まえ、「生徒の自

4 「個が響き合う」とは、生徒が主体となり互いの学びの声が活かされている状態を意味している。また「共同体」とは、個がそれぞれの学びの主体となり、積極的に仲間とかかわる中で、新たな「ものがたり」を生み出していける、言わば「ものがたり」の深化をはかるための集団である。

6 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。（文部科学省『中学校学習指導要領解説 総則編』、2017、77 頁）

7 「語り」の中でも、特に出来事と自己との関連を見つめ、それを筋立てて、その出来事の自分にとっての意味づけや価値づけをする主体的な行為。

己形成につながる『自己に引きつけた語り』をどのように生み出していくか」を大きなテーマとし、「自分自身や自分を取りまく世界の見え方、感じ方の変容」と「語り合い、探究する学びの過程」という視点を特に重視して以下に示す「ものがたりの授業」の定義をもとに実践に取り組んでいる。

★「ものがたりの授業」

「ものがたり」の考え方を取り入れた授業のこと。他者との語り合いの中で、学んだことを過去の経験と関係づけ、学ぶことの意味や価値を実感し、未来につながる自己のよりよい生き方を見いだしていく。

(1) 自分自身や自分を取りまく世界の見え方、感じ方の変容について

林竹二(1987)⁸は、「学ぶということは、覚えこむこととは全くちがうことだ。学ぶことは、いつでも何かがはじまることで、終わることのない課程に一步ふみこむことである。一片の知識が学習の成果であるならば、それは何も学ばないでしまったことではないか。学んだことの証しは、ただ一つで、何かが変わることである。(中略) 学問の場合、ものを見る見方・考え方が変わり、生き方が変わるということです。そして見方が変われば、それに応じて世界そのものが変わってくる。」と述べている。すなわち、学んだことによる新たな知識の獲得だけでなく、それが自分とつながり、自分自身を変えていくものにならなければ、人は学ぶことの意味や価値を実感できないと言える。そこで、授業者として何を重視すべきか。「ものがたり」の授業を構想する中で、以下の3点に着目して、授業研究を行っている。

- ① 授業を通して、生徒にどのように変容して欲しいのか。(教師の願い)
- ② その題材(教科)を学ぶ意義は何なのか。(教科の本質を踏まえた、その教科を学ぶ意義)
- ③ その題材を学ぶことが、生徒の生き方にどのようにつながっているのか。

(2) 語り合い、探究する学びの過程について

「自己に引きつけた語り」を生み出すためには、自ら課題に向き合い、思考を巡らせ、自己や他者に問い、挑戦や失敗を繰り返しながら、学んだことを自分のものにしていく生徒主体の学びにしていくことが大切であると考えている。そういった生徒主体の学びにするために、前回の発表会から、本校で重視しているのが、語り合い、探究する学びの過程である。生徒は「語る」ことによって、自分の中に知識を構成していく⁹。そして、その知識を構成する筋立てに個性が生まれる。語り手によって構成された知識を、異なる筋立ての他者と問い合い、語り合うことで、互いに再構成していく¹⁰。つまり、語り合うことで生徒は学びを深め、自分のものとしていくことができるのである。また、語り合うことは、探究する学びの過程として行われることが重要である。なぜなら、語り合うこと自体が目的化してしまうと、生徒同士のすり合い(吟味する、最適解を導く、合意形成する、など)が行われにくく、学びが深まらないからである。そこで、今回は、各教科における探究する学びを以下の3点に着目して、授業研究を行っている。

- ① 課題(問い)が生徒のものになっていること
- ② 課題追究の方法が生徒のものになっていること
- ③ 根拠にもとづいて語り合い、問い合えること

生涯にわたって学び続ける生徒を育成することは、たやすいことでない。ただ、「ものがたりの授業」には、その可能性を感じている。なぜなら、「ものがたりの授業」を通して学ぶことの意味や価値を実感する生徒たちがいるからである。学んだことから、自己の「ものがたり」を絶えず更新し成長している。「ものがたりの授業」の具現化に向けて、さらなる研究実践を進めていく。

⁸ 「生きること学ぶこと」林 竹二, 1987, 筑摩書房, pp142-143

⁹ 社会構成主義の学習観にもとづく。社会構成主義では、現実の社会現象や、社会に存在する事実や実態、意味とは、すべて人々の頭の中で作り上げられたものであり、それを離れては存在しないとする。そして、学習とは、外から来る知識の受容と蓄積ではなく、学習者自らの中に知識を精緻化し(再)構築する過程であるとする。

¹⁰ 「ものがたり」は、語り手と聴き手の共同行為によって生まれ、語り合うことによって絶えず再構成される。(本校『研究紀要』2014、2016、2018より)

《国語科》

言語による認識の力をつけ、豊かな言語文化を育む国語教室の創造

ー 読むことを通して言葉の価値を実感する国語科授業の在り方 ー

田村 恭子 木村 香織

本校は、自立した学習者を育てるため、学び続ける意欲について研究を行っている。それを受け、国語科では「教材内容」（教材固有の内容）を深めながら「教科内容」（国語科で習得・活用すべき知識・技能）と「教育内容」（教科内容よりも広く、教科の枠組みを超えて広く指導していくもの）を豊かに関連づけ、統合していく単元構成を中心に研究を進めた。

それらの研究は一定の効果はあったものの、「教材内容」の深まりだけに終始し、学びを自己に引きつけた（国語科を学ぶ意味や価値を実感した）と言えない生徒の姿も多くみられた。生徒が自身の読みの変容に気づく際に、読みの方略（他の作品に転用できる知識・技能）の獲得を伴わなければ、国語科を学ぶ意味や価値の実感につながらないのではないかと。そこで今回はこれまでの研究の内容を引き継ぎながら、自分自身の読みの変容に気づき、言葉の価値を実感し、学び続ける意欲をもった生徒を育成するための手立てについて研究を行う。



【考えを語り合う様子】

- （１）〈読みを生きる体験〉と〈読みを自覚する体験〉の充実
- （２）深い読みを生み出すための学習集団づくり
- （３）題材と自己の変容に気づく振り返りの工夫

《社会科》

これからの社会のあり方を自ら考える民主社会の形成者の育成をめざした社会科学習のあり方

ー 「社会観」を語り合うことを通して「今・ここ」を相対化し「社会的自己」を捉え直す ー

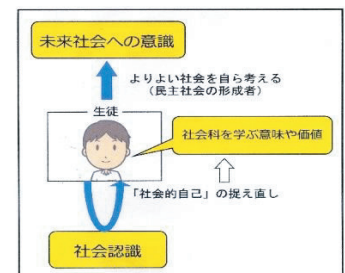
大和田 俊 大西 正芳

民主社会の形成者の育成という社会科の目標に到達するためには、「今、私が生きている現代とは、どのような時代か」、「今、私が住んでいる地域には、どのような特徴があるか」、「今、私が生きている社会には、どのような制度が形作られているか」、つまり、「今・ここ」を捉えられないと、今後の民主社会を形成していくことはもとより、その方向性を構想することすら、子どもたちにとっては困難だろう。このような、『今・ここ』の社会に生きる私を「社会的自己」と定義する。その「社会的自己」を捉え直す手掛かりが、社会科で学ぶ社会的事象である。つまり、さまざまな社会的事象の学びによって獲得される社会認識を鏡として「今・ここ」を相対化することで、それまで漠然としていた「社会的自己」の捉え直しにつながる考えた。

ただし「社会的自己」を捉え直すためには、異なる時代、異なる地域における特殊性に対する確かな社会認識を獲得する一方で、「今・ここ」を生きる自己につながる一般性が必要である。その異なる時代、異なる地域と「今・ここ」を生きる自己とをつなげるのが、「国家とは何か」「豊かさとは何か」など人間社会の本質にかかわる普遍的な概念である。そういった本質的な問いに対して、自分は何を重視して何を重視しないのか、理想の社会とはどんなものなのかという互いの「社会観」¹とそれに基づいた社会像を語り合う姿勢こそ、これからの民主社会の形成者に求められる資質・能力ではないだろうか。－

以上のように考えて、研究主題を設定し、次の３点を研究内容として、研究を進めている。

- （１）「今・ここ」の自己につながる普遍的なテーマを設定し「社会的自己」を捉え直す単元構成
- （２）「社会観」を語り合う場の設定と工夫
- （３）「社会的自己」の捉え直しを「ものがたり」で語り直す場の設定



【研究構想図】

¹ 「社会観」とは社会に対する価値観のこと

《数学科》

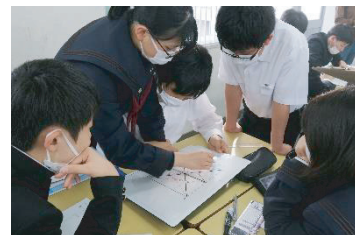
数学で語ること²の意味や価値を実感できる生徒の育成 － 数学的活動を意識した授業から生まれる「ものがたり」を通して －

渡辺 宏司 吉田 真人

数学の本質は、その純粋な抽象的思考にあると考える。すなわち、論理に矛盾がなければ、実存する世界に合わせる必要がないということである。つまり、ある一定の条件（仮定）の下で、正しいと認められた事実（証明された定理）を使って、発見した新しい事実（定理）を証明する作業を積み重ねていくことが、本来の数学の学びである。

しかし、小学校・算数から、中学校、高等学校、大学へと数学が抽象化されていく中で、数学を学ぶことの意味や価値（なぜ、数学を学ぶのか？）を実感できずに、数学嫌いや数学離れが起こっている現状がある。このような状況の中で、「数学を学ぶ意味や価値」を子どもたちに実感させるのが、学校現場に求められている。数学は、系統性の強い教科である。そのため、問題発見・解決の過程を意識し、3年間の学びの中で、数学を学ぶことの意味や価値を涵養していくことが大切であると考えます。

数学の問題発見・解決の過程では、必然的に数学で語ることが行われる。その過程の中にこそ、本来の数学を学ぶことの意味や価値に気づくことができるのではないかと考えた。そこで、次の3点を中心に研究を進めていく。



【数学で語る場面】

- (1) 探究する学びを促す単元構成の工夫
- (2) 数学で語ることを促すための批判的思考力を高める工夫
- (3) 自己の変容に気づくための振り返りの工夫

《理科》

自然事象から問いを見出し、自ら探究する生徒の育成 － 科学する共同体の中でつむがれる「ものがたり」を通して －

鷲辺 章宏 山下 慎平 島根 雅史

生徒は、自然の真理や摂理を自らの手で解明していくことを通して、その過程から得られた学びと自己とのつながりを実感した時、自然事象を新たな視点で捉え直すことができるようになった自分に気づき、学んだことの意味や価値を見出すことができる。このような考えのもと、本校理科では、「自然の真理や摂理の追究」と「意味や価値の実感」を大切に研究を行ってきた。

前回の発表会では、生徒自らが問いを見出し、探究する中で、自己と自然とのかかわりを新たな視点で捉えることのできる生徒の育成をめざし、研究を進めてきた。それらは一定の効果はあったものの、見通しをもって探究を進められていない生徒や、学んだことと自己とのかかわりに気づかず、意味や価値の実感を伴っていない生徒の姿も見られた。そこで今期は、これまでの研究を引き継ぎつつ、生徒自らが疑問に対する仮説を立て、見通しをもって探究する力の育成と、探究する中で生まれた学びの意味や価値を実感させるための手立てについて、次の3点を中心に研究を行っていく。



【実験結果を確認しているようす】

- (1) 自己に引きつけた学びを生むための単元構成の工夫
- (2) 仮説を立てる力を育成するための教師のかかわり
- (3) 自己の自然観の変容に気づく振り返りの工夫

² 数学で語るとは、語る行為の中でも、数学的な根拠にもとづいて語るものと定義する。

《音楽科》

音や音楽の意味を見出し、音楽とのかかわりを深める学習のあり方 ー 鳴り響く音や音楽を吟味する中で生まれる「ものがたり」を通して ー

堀田 真央

音楽を学ぶ意味や価値を実感するためには、自分にとっての音や音楽の意味を見出し、音楽観の変容が起こることが必要だと考えている。また、音や音楽の意味を見出すことができたなら、今後の音楽とのかかわりも深まり、豊かに生きることにつながると思っている。

学習場面においては、その場で鳴り響く音や音楽を吟味し、音楽の特徴を知覚し、それによって自己や他者がどのような感受をしたのかを関係づけていくことを大切にする。表現の工夫を考え試行錯誤を行ったり、作曲者や演奏者の意図などについて語り合ったりする中で、気づかなかった特徴を知覚し、その特徴の意味を見出すことで、楽曲のよさや美しさを考えるきっかけとしていく。そして、「ものがたり」によって、音や音楽を吟味しその意味を見出してきた過程を振り返り、自己の音楽観を意識させ、その変容と今後の音楽とのかかわりについて見つめさせていきたい。そこで今期は、次の3点を柱として、研究を進めていく。



【振り返り前の鑑賞の様子】

- (1) 音や音楽の意味を見出すための「概念」の設定のあり方
- (2) 鳴り響く音や音楽を吟味するための題材を貫く問い及び題材構成の工夫
- (3) 自己の音楽観の変容を意識させるための振り返りの工夫

《美術科》

創造活動の価値を見出す美術の学び ー 作品をもとに対話し、見出した問いに向かう生徒の姿をめざして ー

渡邊 洋往

創造活動とは、表現と鑑賞の両方をさす、美術科教育の本質的な活動である。本校美術科では、創造活動の喜びを見出すことができる生徒の育成のために、活動内容、学習過程の工夫、支援の方法を探ってきた。今研究では、創造活動の「喜び」から、それをさらに含む大きな視点として「価値」を見出す美術の学びを研究テーマとして設定した。

創造活動の価値とは、①歴史的、地理的にあらゆる場面で営まれてきた人間活動の基礎であり、②自らの見方で世界を捉え、答えを見出し、新たな問いを生み出すことであり、③そしてその活動自体が喜びである。近年VUCA（変動・不確実・複雑・曖昧）と呼ばれる時代が到来しようとしており、そこでは自分なりの答え、あるいは問いを見つけることが重要であると言われている。そのような現代において、創造活動の価値を見出すことは、意味のあることであると考えます。

創造活動の価値を見出すためには、自らの見方で対象を見つめ、問いを発見し、その答えを探し求めることが重要である。表現と鑑賞を通して、事象に対して「問い」を見つける課題提案型の思考（アート思考）、最適な答えを見つける課題解決型の思考（デザイン思考）、これらを行き来しながら、自らの問いと答えを探し求める姿の実現をめざしたい。

このような生徒の姿の実現をめざして、以下の3点を柱として研究を進める。



【作品をもとに対話する場】

- (1) 作品をもとに対話する場の設定
- (2) 作品から問いを見出し、活動を通して深める題材構成の工夫
- (3) 自ら美を探し求める姿勢を養う美術環境の整備

《保健体育科》

人生を豊かにし、自分の生き方に責任をもつ保健体育学習のあり方

ー 探究を通して生まれる「ものがたり」を通してー

石川 敦子 徳永 貴仁

これまでに、「運動・スポーツの本当の面白さは何か？」という包括的な問いのもと、豊かなスポーツライフの実現につなぐ異学年合同学習や運動の苦手な子に焦点を当てた体育学習、そして運動・スポーツに多様なかわりをする中で運動・スポーツの捉え直しや自己の「ものがたり」の変容を図ってきた。

今期は、現在の社会状況をふまえ、「スポーツがある意味や価値」、そしてその前提として当たり前になられていた「健康」について焦点を当てて研究を進めていく。

本校保健体育科のめざす生徒像を「人生を豊かにし、自分の生き方に責任をもつ生徒」とし、そのためには保健と体育の両面からのアプローチが必要であると考えた。体育分野では「スポーツ文化を自分に取り入れることで人生を豊かにすること」、保健分野では「健康の重要性を実感し、自分の生き方に責任をもつ」ことを目標とした。

以上のように考えて、研究主題を設定し、次の3点を研究内容として、研究を進めている。



【保健分野での語り合いの様子】

- (1) 保健と体育を関連させた教材の開発
- (2) 教科を学ぶ本質に結びつく自己に引きつけた語りを生むための単元構成の工夫
- (3) 自己の健康・スポーツ観の変容につながる振り返りの工夫

《技術・家庭科》

持続可能な社会を構築する実践力を育む技術・家庭科教育

ー 生活を語り合い、問題解決を実践することで生まれる「ものがたり」を通してー

渡邊 広規 大西 昌代

本校技術・家庭科では、授業での学びは自己の未来の生き方、そして持続可能な社会へつながるものであると考える。そこで自分の生活が持続可能な社会の構築につながっていることを自覚し、自分なりに考えながら生活の問題を解決していくことで、生活をよりよくしたり、自己の生き方を考えたりする主体的な生活実践力を身につけさせたい。

そのために、毎日の生活で当たり前になったり、行ったりしていること（学習前の文脈）から題材を構成し、自分の生活のあたりにずれを生じさせる。そして、自己の生き方を語るだけでなく、教科の特性として、学びを生かして自分の生活にアクションを起こすこと（生活実践力）に変容しているか、そして自分の生活と持続可能な社会にまで視野を広げられているかを見取りたい。

その手立てとして、以下の3つの視点で研究を行い、生徒の生活実践力を育み、自己の生き方へとつなげていきたいと考える。



【自分の生活の問題点を考える様子】

- (1) 生徒の「当たり前」を捉え、より主体的な生活実践力へとつながる題材構成と問い
- (2) ものづくりや改良、修復・修繕、リメイクなどの活動の中で、持続可能な社会の担い手として、語り合い、探究するための場の設定と教師のかかわり方
- (3) ものに込められたこだわりや思いを見つめ直すことで「自己に引きつけた新たな語り」を生むようにするための工夫や手立て

《外国語科》

コミュニケーションへの意欲を高める英語授業の創造 ー「探究的な学び」から生まれる「ものがたり」を通してー

眞鍋 容子 黒田 健太

これまで英語科では、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成に重点をおいて研究を行ってきた。学習前の生徒の考えを把握した上でコミュニケーションの場面を設定したり、ことばの奥深さや多様性を実感させたりすることで、コミュニケーションへの意欲が高まると考え、実践を重ねた。生徒の振り返りを分析すると、日本と外国、日本語と英語の違いを知ること、英語学習や異文化理解の必要性を実感している記述は多く見られたものの、その気づきや学びがコミュニケーションへの意欲の向上につながったとは言い難い。



【課題解決に向けたやり取りの場面】

そこで今回は、「探究的な学び」を生み出す言語活動を単元に組み込む。生徒は、言語活動を通して、「伝えたいことをうまく伝えることができない」といった困難や葛藤に出会い、問題を解決しようと既存の知識や経験と結び付けながら仮説を立てる。その仮説を検証する過程において、「英語で伝えることが難しいと思っていた内容が、この英語表現を使うと伝わるんだ」というように、すでにもっていた知識が実際に運用できる知識へと変化していく。同時に、異なる言語を話す相手と気持ちを伝え合う喜びや達成感が生まれ、それによってコミュニケーションへの意欲は一層高まると考えられる。今回は次の3点を柱として、研究を進めていく。

- (1) 「探究的な学び」につながる単元構成の工夫
- (2) 即興で話す力を育む教師の支援の在り方
- (3) 英語でのコミュニケーションに対する新たな「ものがたり」が生まれる語り直しの工夫

《学校保健》

人間性豊かで心身ともにたくましい子供の育成をめざして ー「他者とかかわる力」を育む養護教諭のかかわり～自己肯定感を高めるためにー

日本 亜矢

前回の発表会では、養護教諭が行う健康相談活動に、ナラティブ・アプローチの手法を取り入れた個の支援と、ソーシャルワーカーと連携し、ソーシャルスキルトレーニングを活用した集団による支援を実施し、その効果を検証してきた。今後も、個と集団との支援をリンクさせながら、更なる心の予防的な取り組みを継続していく。



【ソーシャルスキルトレーニングの様子】

今年度の1年生は、人間関係を構築する、年度当初の2ヶ月間が休校となり、コミュニケーションをつむぐ経験が例年より少ない。そのため、互いを理解し合う体験が少ない分、他者の気持ちを顧みない言動や、SNSも含めた人間関係でのトラブルが多数発生し、傷つき、傷つける場面が見られる。また、本校生徒の多くは、学業に対する心理的なプレッシャーを感じており、現実の自分と理想の自分（なりたい自分）との間を埋められず、自己肯定感が極端に低い生徒も見られる。加えて、自分の気持ちを他者へ伝えることや、他者とかかわりが不得意な生徒の対応が課題となっている。そこで、今回は1年生を対象に、次の2点を柱として、研究を進めていく。

- (1) 「他者とかかわる力」を育むソーシャルスキルトレーニング（SST）の構成と工夫
- (2) ナラティブ・アプローチの手法を取り入れた生徒同士のかかわりの工夫

総合学習シャトル

総合学習シャトル（以下シャトル）のねらいは、教科学習における活用と総合学習CAN（以下CAN）における探究とをつなぐことにある。これまで、シャトルは一般講座（1月と2月）と特設講座（7月）に分けて実施していたが、CANとの接続などに関して次の課題があった。

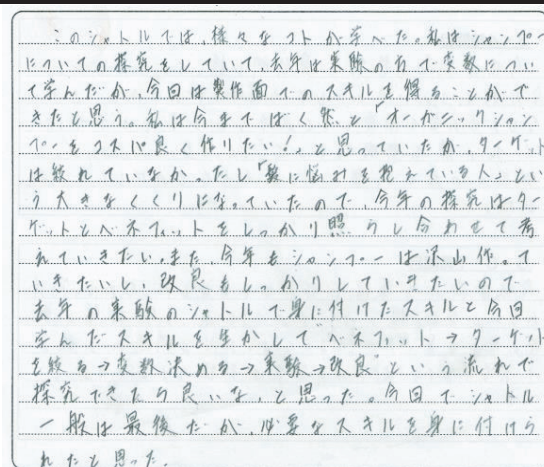
- ・一般講座の内容と特設講座の内容が重なりつつある。
- ・生徒のCANでの探究を考え、探究スキルの精選が必要である。
- ・シャトルでの学びが、CANでの困りの解決になっているのか。
- ・発表を聞く際に、質問する力が身につけていない。

このことを踏まえ、従来の特設講座の内容を見直し、CANの始まる前（または初期）に身につける探究スキルと、探究中に必要な探究スキルとに分けて実施するという方向で、令和2年度は、講座内容と全体の枠組みの見直しを図った。「新シャトル」では、前期8講座、後期8講座の全16講座を用意しており、前期、後期でそれぞれ2講座ずつを選択して受講する形をとる。新シャトル前期講座は、令和3年1月下旬から実施している。後期講座は、6月下旬から7月上旬に実施予定である。

従来のシャトル特設講座		新シャトル		
探究スキル	講座名	期	探究スキル	講座名
I 課題設定力	① 発想法	前期講座	I 課題設定力	①発想法
II 課題追究力	② インタビュー、取材		II 課題追究力	②困りを発見する力
	③ アンケート			③電話・メールマナー
	④ 思考ツール			④アンケート
	⑤ 資料収集			⑤ロジカルシンキング
	⑥ 情報の分析		IV チームマネジメント力	⑥仮説を立てる力
	⑦ データの見方・とらえ方			⑦コミュニケーション力
	⑧ 情報の伝え方			⑧プロジェクトマネジメント
III 表現力	⑨ 文章表現法	後期講座	II 課題追究力	⑨質問力
	⑩ プレゼンテーション1		III 表現力	⑩情報の分析
	⑪ プレゼンテーション2			⑪キャッチコピー
	⑫ 視覚化			⑫プレゼンテーション1
	⑬ グラフの見せ方			⑬プレゼンテーション2
IV 自己評価力	⑭ リフレクティング			⑭視覚化
V チームマネジメント力	⑮ コミュニケーション			⑮グラフの見せ方
	⑯ リーダー養成研修講座			⑯動画編集

【図1 従来のシャトル特設講座と新シャトルの講座】

実践後には、振り返りを行うが、その方法についても、検討の余地がある。図2のように、CANでの探究と結びつけて記述できることが望ましいが、シャトルを通してできるようになったことのみの記述になっている場合も多い。シャトルでの学習を自分なりに意味づけたり価値づけたりすることができるよう、振り返りの視点を工夫することが、「自己に引きつけた語り」を促すために必要であると考える。



【図2 振り返りシートの記述】

総合学習CAN

1 令和元年1月～令和2年11月（CAN2020）の活動時期と概要

今年度のCANでは、生徒のさらなる探究活動の充実に向け、「幅広い探究課題の設定を促す工夫」、「生徒の探究活動を深めるための工夫」の2点を重点項目とし、新たな取り組みや計画の変更を行った。活動時期と概要は下のとおりである。コロナ禍により探究活動が制限される中でもZoomなどのICT機器を用いて外部と連携をとり、また生徒の探究がより深いものとなるよう、「探究深化シート」と「To Do リスト」を活用した。

【令和2年度 活動時期と概要】

総合学習シャトル・CAN						
時期	冬休み・1月・2月	3月	6月	7月・8月・9月		10月・11月
人数	1人CAN	2人CAN	3～4人CAN	CANの日Ⅰ	CANの日Ⅱ	発表会 文化祭
内容	個人で探究テーマを設定する。	2人で意見を出し合い探究テーマを深化させる。	探究の方向性・方法等について専門家からアドバイスをもらったり、予備調査を行ったりする。	調べた方法で調査や実験など探究活動に取り組む。CANの日Ⅰ・Ⅱを活用し、外部の専門家から意見をもらう。		探究成果をまとめ、発表会や文化祭等で発表する。探究の成果を最終論集にまとめる。

（1）幅広い探究課題の設定を促す工夫

生徒が自ら問いを立て、探究することがCANの大きな特徴の1つであるが、そもそも生徒は探究課題を設定することに苦労している。そして、探究する目的がないテーマを安易に設定し、探究が行き詰まる生徒の姿が見られる。そこで、幅広い視点で本当に自分がしたい探究課題を探し、設定するために、3つの視点と注意点を含むワークシートを作成した。

（2）生徒の探究活動を深めるための工夫

より深い探究を行うためには、仮説の設定が重要である。よりよい仮説を設定させるために、昨年度から継続している「探究深化シート」を活用した。しかし、これまでの「探究深化シート」では、仮説の検証を行うために、具体的な行動が分かりにくいという課題があった。そこで、図2のような「To Do リスト」を作成した。「探究深化シート」と「To Do リスト」をうまく活用することで、自分の探究のゴールや問い、仮説を明確にするために何をしなければいけないかを整理することができ、見通しをもった探究が行えると考えた。

＜探究課題設定の3つの視点＞

- 視点1 身近な問題から発想（これ、何とかならない？困っているみんなを助けたい！）
- 視点2 素朴な疑問から発想（えっ！何で？これって本当？どうやっていいの？）
- 視点3 特技や好きなことから発想（ここがうまくできない、どうして？なんで？）

（同じ視点から複数選んでもよい）

＜探究課題設定の3つの注意点＞

- ◆単なる調べ学習でとどまらないか？（ネットで調べたことをまとめて終わりにならない？）
- ◆単にもの作りをして終わりにならないか？（それを作ることで何を明らかにしたいの？）
- ◆自分たちのオリジナルの部分があるか？（どこで誰かがすでにやっているんじゃないの？）

【図1 3つの視点と注意点】

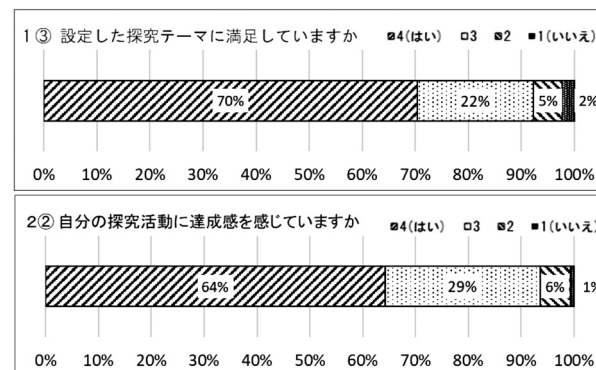
クラスターNo.		
CAN2020 To Do List		
記入日	タスク	実行日
6.10	自転車のライトの発電の仕組みを調べる。	6.17
6.10	自転車でスマホ充電を行う際に必要な材料を調べる。	6.17
6.17	香川大学の工学部の先生に電気回路の質問メールを送る。	6.24
*タスクが完了すれば、斜線を引きましょう。		

【図2 To Do リスト】

2 CAN2020の成果と課題

図3の探究課題についての生徒のアンケート結果から、課題の設定と探究活動について、肯定的な意見が9割を超えており、課題設定と探究を深める手立てについての取り組みは有効であったと感じている。また、アンケートに書かれた生徒の記述から、CANだけでなく授業や日常のなかで課題を見つけたり仮説を設定したりするようになった生徒の様子が見えてきた。

また、図4の教師による生徒の見取りから、1～3年生がそれぞれの役割を果たし、結果からさらに疑問を見つけ、それをどのような方法で明らかにすればよいのかを考えるようになった。しかし、課題をどのように追究していけばよいか、見通しをもつことのできないクラスターも見られた。そのような生徒に対する教師側の支援や何らかの手立てが必要であると考えられる。さらに、生徒のアンケートからはCANの学習と教科の学習のつながりがあまり意識されていないということも明らかになった。今後は生徒の探究を深めると同時に、そのような点についても検討してい



【図3 生徒のアンケート結果】

きたいと考える。

3 令和3年度のCAN2021に向けて

生徒の探究活動をより深いものにするための、次期CANの重点事項は、以下の通りである。

- ① シャトル学習と連携し、発表や表現、問う力を向上させるための取組
 - ② 生徒の主体性を意識した探究課題の設定
 - ③ 教科の学習とのつながりを意識した取組
- これらの重点項目を中心に改善を行い、学校の研究文化を象徴する「最高の学びの場」としてさらに進化させていきたい。

CANの日Ⅱのレポートの記述から、とにかく草から紙を作れたことに喜びを感じていた。課題としては、紙として成り立っているのが検証できていないことが上がっていた。教員のアドバイスにより、はがきとして通用すれば、それを証明できるのではないかという仮説を立てていた。「草の種類」や「水溶液」を変数として実験を行いたかったのだが、時間がなかったので後輩がしてくれとうれしいといった記述もあった。できた紙ははがきとして成り立ったが、穴が開いていたり補強をしたりしていた。これを受け、時間のない中、さらに草から紙を取り出すことにチャレンジしていた。CANの時間以外の時間も探究に費やし、補強なしではがきとして成り立つ紙を作り上げた。3年生が突っ走っていたところもあったが、チームワークよく、段取りよくやっていたように思う。

【図4 教師による生徒の見取り】

3年生のCAN物語より（一部抜粋）

3年間を振り返り、僕にとってCANとは、「自分の好きなこと、興味があることに根気強く取り組むこと」であったと思う。・・・特に、3年生のCANはそうであった。1,2年生の時とは比べ物にならないぐらい熱心に頑張った。CANは僕に1つのことを真剣にすることはとても楽しいことだということを教えてくれた。どうしたらうまくいくのか、どうしたら今よりもっといいものを作れるのかと考えていくことが本当に楽しかった。CANは、これから大人になった時に一番大事な思考力を養うためにしているのだと思う。ここがいけなかったから次はどうするのかと考えることが一番大事なことだと思った。

また、CANを通して、たくさんの人間関係が築けていったと思う。今まで話したことのなかった先輩や後輩にたくさん関わってうれしかった。学年別でクラスターを組むことで、縦との関係がより深まった。そういう貴重な経験をさせてもらえ、本当に良かったと思う。にとって好きなこと（価値があるもの）ならば、無我夢中で楽しみ、学べば（磨き上げれば）それは周りからも賞賛されるものになると思います。



語り合いの時間

語り合いの時間とは、探究する集団の土台づくりを目的として、答えのない問い（「勉強は何のためにするのか」など）に対し、参加者全員でじっくりと考え、語り、聞き合う時間である。

昨年度より取り組み、2年目を迎えた本年度は、以下の3点に取り組んだ。1点目は目的の差別化である。授業で行う「本編」と短学活の時間で行う「ミニ」の目的を差別化し、「本編」は考えること、「ミニ」は語ることに重点を置き、扱うテーマも区別して設定した。2点目は問う力の育成である。他教科でも活用できる「問いの型」を作成して各教室に掲示したり、活用の機会を教師が紹介したりするなど、問うことへの意識づけを行った。3点目は授業時数の確保である。昨年度と比較し、語り合う機会をより多く確保するため、1学級あたり年間5時間の「本編」を計画し、実践中である。結論を出すことを目的とはせず、教師も参加者の一人として生徒と一緒に問いに向き合うようにしている。じっくり考え、安心して語れる空間をつくることで、どの学級でも自分の経験をもとに素直に語り合い、考えを深める生徒の姿が見られた。

問い合うと、わかり合える。気づきを与える。

- ① 具体例を問う 「例えば・・・？」
- ② 理由や根拠を問う 「どこから（なぜ）、そう思ったの？」
- ③ 言葉の意味を問う 「〇〇って、どういうこと？」
- ④ 反対の場合を問う 「そうじゃない場合は、ないのかな？」
- ⑤ 仮定を問う 「もし〇〇だったら、△△になるの？」
- ⑥ ちがいを問う 「どこまで〇〇で、どこから△△だと思う？」
- ⑦ 要約を問う 「要するに、こういうこと？」

授業でも、問い合ってみよう！
Let's ask each other!

【問いの型】



【語り合いの時間「本編」】



【語り合いの時間「ミニ」】

1 大学出前授業

香川大学の各学部の先生を講師としてお招きし、講演をしていただいた。生涯学習、キャリア教育の一環として実施しており、生徒たちが将来について考える機会となることを期待している。

学部	講師	内容
教育学部	妹尾 理子	生活と環境
法学部	石井 一也	ガンディーの非暴力について
経済学部	岡田 徹太郎	未来の経済を少子化から考えよう
農学部	伊藤 文紀	アリってどんな生き物？
創造工学部	角道 弘文	水を巡る課題について考えてみよう

2 保護者による進路学習

様々な業種で活躍される保護者の方々をお招きし、それぞれの仕事の業務や特徴、その人が感じる苦労ややりがいなどを語っていただいた。生徒たちが仕事観を見つめ直し、自分たちの未来を考える機会となることを期待している。



あ と が き

副校長 石川 恭広

本年度は、本校教育研究発表会を6月12日に開催する予定にしておりましたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を踏まえ、本校での授業公開による発表から誌上発表に代えさせていただきました。そして、県内外の教育機関等に約1400冊の研究紀要を送付させていただき、本校研究の成果を広くお示しすることができました。

本校研究のキーワードは「ものがたり」の授業づくり。そのねらいは、学びの意義や価値を実感させ、生涯にわたって学び続ける強い意欲のある生徒を育むこと。これは、どの先生にとっても共通するめざしたい授業の方向ではないでしょうか。

この「ものがたり」の授業をどのように実現させていけばよいのか。その授業の方向を、どの先生にも分かりやすいもの、実践しやすいものとなるよう、引き続き研究を進めています。特に、授業での学びが生徒一人一人の学ぶ価値の実感につなげていくためには、「自己に引きつけた語り」を生み出す授業構想が必要になります。学びをいかに生徒自身とつなげていくのか。決して簡単なことではありません。そこに研究の重点を置いて取り組んでおります。

今後も、めざす授業づくりのノウハウを具体的に示していけるよう、地道な実践努力を重ねて参ります。引き続き、皆様方からのご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。